

第5回目 御子の血による贖い

〔聖書箇所〕 エペソ人への手紙 1章7節 【新改訳改訂第3版】

私たちは、この御子のうちにあつて、御子の血による贖い、すなわち罪の赦しを受けているのです。

これは神の豊かな恵みによることです。』

はじめに

●天の父なる神は、御子イエス・キリストを通して、天にあるすべての霊的祝福をもって私たちを祝福してくださいました。私たちの父は祝福の神であり、私たちひとりひとりを祝福したいと願っておられるばかりか、その祝福の一切切の手だてを周到な計画をもって準備された方です。そうした周到な計画をもって準備された祝福の中から、今回は、私たちを神ご自身の子どもとするためにこの世界の基の置かれる前から選んでおられたということを学びました。私たちが神を選んだのではなく、神が私たちを選び、愛されたのです。そのことが具体的にどのようにしてなされたかを説明する一文があります。それが7節です。

「私たちは、この御子のうちにあつて、御子の血による贖い、すなわち罪の赦しを受けているのです。

これは神の豊かな恵みによることです。』

●この聖句にはキリスト教の大切な真理を表す専門用語があります。それは「贖い」ということばです。このことばについて、できるだけわかりやすくお話ししたいと思います。7節では、これまでの3~6節にある「神は・・・」という主語が、「私たちは・・・」に変化し、「・・・を受けている」という受身形の表現になっています。つまり、「この御子のうちにあつて、を受けている」と記されています。ただし原文は、「エコー」(ἐχω)の1人称複数で、「私たちは持っている」(we have)となっています。受動態の動詞ではありませんが、この御子イエスがなされたことが私たちと深くかかわっているために、御子にあつて「を受けている」と訳されています。キリストにあつて私たちが受けている(持っている)のは「贖い」です。「贖い」とはどんな意味なのでしょう。まずは、このことばの定義からはじめたいと思います。

1. 「贖い」ということばの意味

●ここで「贖い」と訳された原語は「アポリュトローシス」(ἀπολύτρωσις)ですが、これをヘブル語にすると「パーダー」(הִדָּר)の名詞形「ペドウト」(תַּדוּת)です。類義語として「ガーアル」(לְאַג)があります。「パーダー」が買い戻しのために値を支払うという意味合いが強いものに対して、「ガーアル」は物や人が本来の所有者に帰る、つまり権利の復権を意味します。しかし、いずれもだれかがそのために代価を支払うことは変わりありません。ここでの代価は、「御子の血(=いのち)」です。出エジプトの時には初子の「小羊の血」でした。ちな

אגרת שאול אל האפסים

みに、「贖う」という意味の語彙として「カーファル」(כַּפַּר)があります。それは罪を覆って、罪を赦すという意味で使われている語彙です。したがって、エペソ書 1 章 7 節の「贖い」には、ヘブル語の三つの語彙の意味が含まれているように思われます。

●「贖い」と訳された原語の「アポリュトローシス」(ἀπολύτρωσις)は新約聖書に 10 回使われ、そのうち 9 回はパウロ書簡に使われています。その基本的な意味は、身代金の支払いによる解放、釈放、あるいは、捕虜や奴隷の買い戻しです。「アポリュトローシス」の概念は旧約聖書と連続しています。第一に、出エジプトという歴史的な事件で、神がイスラエルをエジプトの奴隷から解放して、ご自分の民とするということが「贖い」を示すものです。また第二には、バビロン捕囚からの解放も同じく「贖い」を示す出来事です。そうした流れの中に、**新約聖書での「贖い」とは、神が罪人である私たちを、罪と死の中からイエス・キリストの十字架の血潮によって救い出し、神の子どもとすることを意味しています。**エペソ書では 3 回、以下の箇所に使われています。

① 1 章 7 節

私たちは、この御子のうちにあつて、御子の血による贖い、すなわち罪の赦しを受けているのです。これは神の豊かな恵みによることです。

② 1 章 14 節

聖霊は私たちが御国を受け継ぐことの保証であられます。これは神の民の贖いのためであり、神の栄光がほめたたえられるためです。

③ 4 章 30 節

神の聖霊を悲しませてはいけません。あなたがたは贖いの日のために、聖霊によって証印を押されているのです。

●他の箇所としては、ローマ 3:24/8:23、I コリント 1:30、コロサイ 1:14、ヘブル 9:15/11:35 があります。新約聖書の「贖い」は、イエス・キリストの十字架の血潮による、神の恵みによる一方的な神の愛に基づいています。御子イエスの血は私たちのすべての罪—「パラプトマ」(παράπτωμα)の複数=「ハッター」(ἁτή)の複数—を赦し、神の前に義とします。しかしその完成はキリストの再臨を待たなければなりません。すでにその贖いの日のために聖霊によって証印が押されています。贖いの完成の時には、私たちのからだ¹が贖われてキリストの栄光のからだと同じ姿に変えられます。つまり、朽ちることのない不死のからだ²が与えられるのです。

●「贖う」ということがどういうことかを、ここではヘブル語の「パーダー」(פָּדָה)ではなく、類義語の「ガーアル」(גָּאַל)で説明したいと思います。

動詞の「ガーアル」 (贖う)

人が失った財産や権利を身代わりとなって買い戻すこと

名詞の「ゴーエール」(贖う者、贖い主)

人が失った財産や権利を身代わりとなって買い戻す資格のある人物のこと

●いずれも、「身代わりとなって」ということばが出てきます。身代わりになるということは、何か得をするというよりは、自分にとって損失を招くかもしれないというリスクを覚悟しながらも、近親者のために代わって責

任を取る、弁償するといった意味があります。

●神の民であったイスラエルの民は、きわめてレベルの高い福祉を神によって保障されていました。神が定めたゴーエールの義務、あるいは責任について聖書は記しています。落ちぶれて困窮している親類がいた場合、その親類を救い出す義務と責任を負うべきことが、神の律法によって定められていたのです。その場合、ゴーエールとなる者の資格は親戚で一番近い者がその責任を果たさなければなりません。内容的には、

(1) かなりの金銭的負担の責任を要することであったこと。

(2) 子孫を絶やさないために、その名がイスラエルから消し去られないようにする責任を要したこと。

具体的には、残された妻を娶り、生まれる長男に死んだ兄弟の名前を継がせなければなりません。

それぞれの神の子孫がその名を絶やさないためです。

●福祉理念としては素晴らしい内容ですが、その責任を果たすことは現実的には決して容易でないことは推察できます。買い戻す権利は、それを持つ者にとって必ずしも喜ばしいものではありませんでした。なぜなら、余りにもリスクが大きすぎたからです。良い福祉理念であっても、必ずしも、現実的ではなかったのです。ところが、聖書の中に、その負担、責任と義務を喜んで引き受けた人物がいます。旧約聖書の「ルツ記」に登場するボアズという人です。イエス・キリストの系図に、実は、このボアズがいることを頭の片隅にでも入れておきましょう。そこで、これからゴーエールという買い戻しの権利を持つ者がどういう者かを一つの物語を通してお話したいと思います。それは旧約聖書の「ルツ記」です。

2. 「ルツ記」に見るゴーエールとしてのボアズ

(1) 飢饉のため約束の地を離れざるを得なかったエリメレク一家

●飢饉という問題、生死にかかわる問題にぶつかったとき、人は神から与えられたものや場所を放棄してしまいやすいことをこの物語は取り上げています。信仰の父と言われたアブラハムさえも、飢饉という問題に直面したとき、神に導かれた場所を離れ、自分勝手に食べ物があるところへと移っていきました。決して他人事とは思えない問題です。このルツ記に登場するエリメレクの一家もそうでした。彼らはイスラエルの地のベツレヘム(パンの家)という場所を離れて、モアブという地に移りました。当然、神から与えられていた土地の財産を人に売り払って行ったのです。そのエリメレク一家の構成は、夫のエリメレク、妻のナオミ、そして二人の息子たちでした。

(2) 不条理とも思える試練の中で夫と息子を失った妻ナオミと息子たちの二人の妻

●ところが、移り住んで間もなく、夫のエリメレクが死にました。その後、二人の息子たちはそれぞれモアブ人の女性を妻として迎えました。妻の一人はオルバ、もう一人はルツでした。そこで彼らは10年ほど暮らしましたが、その間に、その二人の息子たちも妻を残して死んでしまいました。残されたのはエリメレクの妻ナオミと

אגרת שאול אל האפסים

二人の息子たち妻、オルパとルツでした。彼女らは途方に暮れたでしょう。稼ぎ頭を失ったのですから。相次ぐ不条理な死を彼女らは経験しました。なんでこうなったのか、そもそも、自分たちの住むべき場所を、神から与えられた土地から離れたのが間違いだったのでは・ ・ ・ いろいろな自分を責めることばがナオミの心に聞こえていたのかどうか、聖書はそのことについては沈黙しています。

(3) 故郷に戻る決心をしたナオミと彼女を慕ってついでにきた嫁のルツ

● 姑のナオミは、いろいろと考えて自分の故郷であるベツレヘムに帰ろうと思立ちました。そのころナオミは、自分たちが捨てたベツレヘムの畑には豊かな収穫があることを人づてに聞いていました。そして二人の息子の嫁を呼んで「あなたがたも自分たちの父の家に戻りなさい」と勧めました。しばらく「帰れ」「帰らない」という問答が続きますが、オルパという嫁は聞き従って帰りました。しかし、もうひとりの嫁であるルツは姑のナオミにどこまでもついていくと言って、すがりついて離れませんでした。ルツはナオミに何と言ったと思いますか。こう言ったのです。

「あなたを捨て、あなたから別れて帰るように、私に仕向けなくてください。あなたの行かれる所へ私も行き、あなたの住まわれる所に私も住みます。あなたの民は私の民、あなたの神は私の神です。あなたの死なれる所で私は死に、そこに葬られたいのです。もし死によっても私があなたから離れるようなことがあったなら、主が幾重にも罰してくださるように。」と。ものすごいルツの決心にナオミは何も言うことができませんでした。ルツの決心もすばらしいですが、そう言わせたナオミの影響力もすごいと思いませんか。「あなたの神は私の神です」と言わせたのです。自分の夫が死に、二人の息子たちも死んだのに、彼女が神を呪うことをしなかったからだと思います。そのナオミの神への信仰にルツの心に何かしら触れるものがあったのではないかと思います。単なるご利益的信仰ではこうはなりません。

● 昔、NHKで「おしん」というドラマがありましたが、ナオミはまさに「おしん」のようです。どんな苦難や困難にも耐える姿です。ルツもナオミと運命を共にすると言っても、将来的にみて何の保障もないのですが、ルツはオルパとは違って、ナオミの信じる神を信じるようになりました。ここにも神の確かな選びが隠されています。なぜなら、異邦人のルツがやがて救い主であるイエス・キリストの子孫となる者の母となるからです。そんなことを彼女は知るよしもありませんでしたが、「はからずも」、確実に、神のご計画の中に導かれていくのです。

(4) 「はからずも」

● 故郷に戻った二人は、人の畑で落ち穂拾いをするしかありませんでした。ところが「はからずも」、そこはボアズという人の畑でした。二人が旅をしてベツレヘムに着いたとき、ナオミを知る者たちが驚きました。「ナオミ」じゃない!! ナオミはこれまでの自分の人生に起こった辛い出来事を正直に話しました。「私をナオミと呼ばないで、マラと呼んで下さい。」と言いました。これはかつての私ではありません。夫も息子もいて満ち足りていましたが、今では何もかも失った者です。「マラ、おしんと呼んでください」と自分に起こった出来事を正直に話しました。見栄を張らないこうした正直さも、ナオミがルツに与えた感化のひとつではないかと思います。

● 不条理とも思える試練の中で、もしナオミが自分の運命を嘆き、神に対して愚痴をこぼすような姑だとしたら、

אגרת שאול אל האפסים

ルツ記は書かれなかったと思います。ナオミの苦しみは、異邦人であるルツが神の民に加えられるための周到な神のご計画だったのかもしれませんが。まさに度重なる苦難の嵐の中に咲いた一輪の花、その一輪の花こそルツという存在なのです。⇒ローマ8章28節。しかし、まだ姑のナオミはこのことに気づいていません。

●彼らがベツレヘムに着いたからと言って、自分の家もなく、仕事もあるわけではありません。当時、イスラエルの国で、人の畑での落ち穂拾いは、孤児とか、未亡人、貧しい者、在留異国人といった、いわば「社会的弱者」のために設けられた公の救済の道でした。しかし、神の律法が規定するそうした福祉の理念と現実にはギャップがあったようです。不親切、邪魔者扱い、いじめを思わせるような発言が記されています。ところが、そうした現実の中で、「はからずも」です。人の思いや考えを越える「はからずも」です。ルツが出かけて行った畑の持ち主は、なんとナオミの親戚に当たるボアズという人の畑だったのです。

(5) ルツとボアズとの出会い

●ここで、ルツとボアズははじめて出会います。ボアズは人づてにルツのことを知っていたらしく、彼女に親切にするよう、わざと多くの落ち穂を落とすように自分の部下に指示しました。ボアズのルツに対するその親切な態度に、ルツ自身が驚き、意外に思っただけでなく尋ねました。「どうして親切にしてくださるのですか」と。その質問にボアズが答えています。それはあなたが姑ナオミに良く仕えていること、自分の父や母を捨てて、ナオミを信頼して見知らぬ地に来ていることなどを聞いているからです。おそらくそこにルツの神への信仰も見たのだと思います。

●夕方、ナオミのもとに抱えきれないほどの落ち穂を持って帰ってきたルツの口から、ボアズの名前が出たときのナオミの驚きは尋常なものではありませんでした。なぜなら、このボアズこそ、先祖の代から譲り受けた土地を買い戻し、絶えんとする家系の血筋を残すことのできる権利をもっている人だったからです。また、ナオミの尋常ではない驚きは、それだけ、彼女たちの立場が弱く、みじめで、困窮していたことを物語っていると思います。

(6) ナオミの妙案

●ボアズの名前がルツの口から出たとはいえ、彼が神の律法が定めている「買い戻し」をしてくれる人かどうか、それを試すために、ナオミはルツにある一つのことをするように指示しました。その指示は当時の習慣だったようですが、ボアズの寝ているところに忍び込んで寝るということでした。それはボアズの權威の下に身を置くという当時の習慣だったのですが、もし拒絶されれば、深く傷付けられるかもしれない行為です。しかし、ナオミはボアズのルツに対する親切が単なる親切なのか、それともゴーエールとしての義務を果たしてくれる人物だからなのかを知りたかったのです。

(7) ゴーエールとなることを公言したボアズ

●その答えをナオミは知りました。ボアズがゴーエール、つまり買い戻しの権利を持つ者として、ナオミとルツの財産を買い戻してくれるばかりか、ルツを自分の妻として迎え、その血筋の者を絶やさないための責任を自発

אגרת שאול אל האפסים

的に果たすことを公言してくれたのです。「買い戻しの権利」というものは、それを持つ者にとって、必ずしも喜ばしいものではありませんでした。なぜなら、その責任を果たすということは、相当な経済的負担を余儀なくされたからです。しかしボアズはあえてその責任を果たすというのです。そのあかしとして大麦6杯をプレゼントしました。これは「責任をもって事にあたります」という意思表示でした。これはルツに対する真の愛がなければできないことではないでしょうか。しかし、ボアズは「買い戻しの権利」を持つ一人ではありましたが、法的にはボアズよりも近い親類がいました。

●ドラマはいよいよ大詰めです。しかしここで、ボアズよりももっと法的に近い「買い戻しの権利を持つ親類」がその責任を果たすならば、ルツとボアズの出会いはそれまでです。ところが、その彼が公の場で拒否したのです。それを断る理由は、まず、ルツが異邦人のモアブ人であるということ。神の律法では異邦人のモアブ人は10代目の子孫でさえ、主の集会に入ることはできないとされていました。とすれば、ルツを助け、妻として扶養する義務は法的にはないのです。へたをすれば、負担が多くて、自分自身の相続地までも損なうことになりかねない。その人は親切心がなかったわけではありませんでしたが、親切心だけでは、ひとたび落ちぶれた者を徹底的に買い戻すこと、つまり贖うことはできなということ。余りにリスクが大きすぎる。ボアズのルツに対する愛がなければ買い戻すことはあり得ないことなのです。しかし、ボアズは全財産を投げ出してでも、エリメレクの財産を買い戻し、合わせて、ルツとナオミの生涯までも責任を負うことを、公の前で、告白したのです。

●ルツにとって、ボアズはまさに神が備えて下さったゴーエール(贖い主)だったのです。そんな出会いが、「はからずも」与えられるとは、モアブの地を去る時にルツは考えもしなかったはず。異邦人である彼女を、なんら偏見なしに、真実な愛をもって妻として迎え入れてくれるボアズと出会ったこと、それこそが、彼女が祝福された要因です。彼女の努力ではありません。神が備えて下さったボアズとの出会いこそ、神の恵みだったのです。人間的な視点からは「はからずも」のように見えますが、神の視点からは用意周到な、必然の計画だったのです。だれもが、ボアズのような人に出会いたいと思うはず。はず。

3. 永遠のゴーエール(贖い主)としてのイエス・キリスト

●ボアズこそ永遠の贖い主としてのイエス・キリストをあかししています。実は、このボアズこそ神から遣わされた御子イエスを指し示しています。「贖い」とは「苦境からの救出」+「権利の回復」です。「苦境」とは、罪とそれがもたらすさばきを意味します。私たちは御子の血潮によって、すでに贖いの恵みとしての「罪の赦しを受けている」のです。「罪から来る報酬は死」(ローマ 6:23)です。しかし、私たちが犯した罪の支払いのために、御子イエス・キリストが私の身代わりとなって死んでくださいました。それゆえ、私たちが支払う死はもうありません。これが罪の赦しです。そのみならず、イエス・キリストは死からよみがえられて、私たちが神の子どもとして生きるすべての祝福を、永遠に受けられるようにして下さいました。これがゴーエール(贖い主)です。「私たちは、この御子のうちにあつて、御子の血による贖い、すなわち、罪の赦しを受けているのです。これは神の豊かな恵みによることです。」御子イエスを私たちのために遣わして下さいました父なる神が、今もそして後も永遠にほめたたえられますように。